

## 巻頭言

# 洗練された上品な日本語を話す

日本語・日本文化教育センター センター長

田口 聡志

「洗練された上品な日本語を話せるようになりましょう。」

2019年4月初頭、わたしはセンター長着任後すぐに、留学生達と一緒にセンターの履修ガイダンスに参加したのだが、そこで、ガイダンス担当の先生からこの説明を聞いた時、特にこの「洗練された上品な日本語」という言葉が、わたしのところに強く響いた。また同時に、センターの志の高さにとても感銘を受けたのを、いまでもはっきりと覚えている。

ただ単に「言葉を話す」だけでなく、「洗練された上品な言葉を話す」ということは、普段からなかなか意識してできることではない。たとえばビジネスの場における英語でも、単に英語を話すだけでなく、上品で教養ある英語を話すことができれば、取引先や交渉相手との関係性はうまくいくなどと言われることもある。しかし、私自身も英語を勉強していて痛感するが、何とか相手と意思疎通ができたなら、何とか意味のある英語論文になったら、というのに必死で、なかなかその次元にまで至らないというのが現実である。

洗練された上品な言葉ということに関連して(!?), 私にはもうすぐ2歳になる子供がおり、1歳半を超えた頃から、急に言葉(らしきもの)を発するようになった。「パパ」「ママ」からはじまり、「アンパン」(アニメのアンパンマンが好きなので、それを観たいときにはこう言う)、「アクア」(ご飯を食べたいときに何故かこう言う)など、そして最近はまだ少し意味のある「あお」「あか」などの色を指し示す単語や、絵本の読み聞かせをした際にその台詞を少し真似するような言葉も発するようになってきている。まさにいま、人の発達を目の当たりにしており、親としては(そして人のところに興味を持つ研究者としても)とても嬉しく思うのだが、それと同時に、わたしはいつも子供と接し

ていて、あのガイダンスで聞いた「洗練された上品な日本語」というキーワードを思い出す。この子がもう少し大きくなって、可愛い笑顔で、「パパ、おやすみなさい」などと話してくれたらいいな、と妄想してみたりする。(もっとも、「おやすみなさい」が「洗練された上品な日本語」なのかは意見の分かれるところかもしれないが、しかしそれは置いておくとして) 何となく、子供の未来と「洗練された上品な日本語」という言葉が、いつもぼんやりとオーバーラップしているのである。

日本語・日本文化教育センターは、(前身の留学生別科時代から) 今年で20周年を迎える。我々は、この20年間で、留学生教育において「洗練された上品な日本語」を目指してきた。そして、それを達成すべく、きめ細やかなレベル分けを試行錯誤し、かつ、密なチームでの組織的・体系的な教育体制の構築を模索し、いまに至る。大学が置かれている環境が激変し、現在の大学はグローバル化の波にさらされている。国際的な大学ランキングに大きく注目が集まっていることなどをみていると、きっとこれから先の未来は、その傾向はもっと強くなると思われる。その中で、我々のセンターが担う役割はとても大きい。未来の同志社大学のために資する、そして世界との、未来との架け橋となるセンターとして、これまで培ってきた20年という時間を大切にしつつ、今後も教育に、研究に邁進していけたらと思う次第である。